

ずいそう

雲上の頂に魅せられて

山邊義修



1. 登山との出会い

私の登山を始めるきっかけは、約40年前の大学2年生の時。当時、東京で生活することを夢見て、九州福岡から上京したものの、学生生活といたら、ろくに勉強もせずに寮の仲間と麻雀、パチンコ、酒飲みといったグウタラな生活に、いい加減いや気がしてきた大学二年の夏、友達と二人で信州を旅行した。

避暑地であり観光スポットとしても有名な清里で八ヶ岳連峰を初めて見たとき、その景観と広大なスケールに魅せられて、登ってみたいという衝動にかられたことを今でも新鮮に記憶している。

そこで、清里で地図、固形燃料とカップラーメン、インスタントコーヒー、ポンチョを購入して、友人と二人で行けるとこまで行こうと、八ヶ岳の主峰「赤岳」を目指して長大な真教寺尾根を登った。ちなみに、長野県と山梨県とのほぼ県境にある真教寺尾根から赤岳までは、登り約6時間半、下り4時間半。その時の服装は、ジーパンにサファリシャツ、靴はスニーカー、装備は上野のあめや横丁で購入した米軍のダッフルバッグに着替えや食料を入れていざ出発。本格的な登山経験のない二人であったが、好奇心だけをエネルギーに頂上めざしひたすら登った。赤岳山頂に到着した時には、ガスの影響で展望は全く利かなかったが、充実感、達成感は味わえた。持参の固形燃料でお湯をつくりカップ麺の簡単な食事をすませて下山を急いだ。天気は悪化しすでに雨が降り始めていた。

無謀な登山の代償は下山時に待っていた。激しい雨に強風も加わって、安物のポンチョの隙間から容赦なく雨が浸入し、身体はびしょ濡れ。おまけに、とっくに日が暮れて、友人のヘッドランプだけを頼りに、暗闇の中を手探りの過酷な下山が続く。寒さと疲労で身体が限界に達しようとしていた時、山麓の牧場に一軒の民家を発見。思わず友人と抱き合って喜んだ。牧場のご主人に温かいコーヒーをご馳走になり、おまけに最寄りの駅までジープで送っていただいた。

この山行で登山の喜びと怖さの両面を体験することになった。もっとスキルを磨いて本格的な登山をやりたいという気持ちから、大学の登山サークルに入部を

決意することになる。

2. 地獄の知床半島合宿

学生生活で忘れてできない山行の一つに夏の知床半島全山縦走合宿がある。オホーツク海に突出した全長約70kmの半島で、私の記憶では当時、積雪期の全山縦走は記録されているものの、夏期の全山縦走は未踏ということだった。なぜならば、稜線に登山道はなく、ハイマツの低木林が行く手を阻んでいること。また、稜線上に水場がなく、水を確保するためには、いったん稜線から外れ、2～3時間かけて沢に水源を求める以外ないこと。さらに、ヒグマの高密度な生息地帯であることなど。

我々サークルの計画は、約2週間の期間をかけて知床半島の付け根に位置する斜里岳（日本百名山、1,547m）から知床半島稜線を縦走し、先端の知床岬を目指すというもの。縦走隊と荷揚げ隊とで構成した。

この合宿をむかえるまでは、豊富な情報収集と綿密な計画作成、そして厳しいトレーニングを積み重ねて万全の態勢で臨んだつもりであったが、楽しめたのは、合宿初日の一般道の登山が可能な斜里岳登頂まで。知床半島の稜線に足を踏み入れた時から、合宿前の我々の大いなる夢や野望は粉碎された。知床半島の縦走は、想像をはるかに超えた厳しい環境であった。

肉体的なダメージとしては、ハイマツを避けながらの縦走。30キロを超えるザックを抱えてのハイマツの藪漕ぎは体力の消耗を加速させる。また、道なき道を進むため、高度なルートファインディング力を求められる。進むべき方向を誤っては、それを取り戻すのに時間と体力を浪費する。のどの渴きを潤したくても貴重な水の量は限られている。のどを湿らす程度にしか補給できない。さらに想定外だったのがアブの攻撃だ。休憩時にどこからともなくアブの大群がやってきて、顔や腕に容赦なくとまって、血を吸いまくる。退治しても次から次にやってくる。疲労困憊の身体では最終的にアブに軍配が上がる。アブのおかげで我々の顔面はパンパンに腫れ上がる始末である。ヒグマよりも、よっぽど恐ろしい生き物である。

のどの渇きには悩ませられた。荷揚げ地点で水を確保するまでは、わずかな水をつないでいくしかない。水が満身に補給できないので食事ものを通らない。腹いっぱい水を飲む場面が夢に出てくるほど。のどの渇きが極限に達すると、クマザサに付着した水滴をなめたり、歯磨き粉のチューブをなめて渇きを癒すほど。こうした過酷な合宿の日々を重ねていくうちに、肉体的にも精神的にも極度の疲労が蓄積していき、やがて、こんな日々がいつまで続くのだろうといった共通の悲壮感が隊員を襲い始め、行動意欲が徐々に低下していく。そして、これ以上の縦走は体力的に困難と判断し、道半ばで全山縦走を断念。計画を変更し稜線から沢筋を下山し、海岸線を歩いて知床岬を目指した。

万端の準備で臨んだ合宿であったが、知床の大自然にあっけなく屈することとなり、結果的に知床半島全山縦走は達成できなかったが、一定の収穫はあった。強靱な肉体と精神力、そして高いレベルの「地形を読む能力」と「登山道を発見する能力」いわゆるルートファインディング力が、この知床半島には求められるということを痛感した。

現在もなお、四季を通じて北アルプスを中心に登山を続けているが、知床の夏合宿の経験は今でも忘れることができない。

3. 三種の神器

登山装備で、これだけは揃えろという「三種の神器」がある。登山靴、ザック、そして雨具である。

雨具は、従来のナイロン製から現在ではゴアテックス製が主流だ。雨水は通さず、体内の湿気は通すといった防水透湿機能を有した素材である。ナイロン製に比べ価格はかなり高価であるが、暴風雨時においても安心して行動できる優れものだ。防寒着としても併用できるので重宝する。

登山靴は、学生時代既製品を使用していたが、どの商品も常に違和感があったので、それ以降オーダーメイドにしている。植村直己をはじめ有名登山家が愛用している東京巣鴨にある登山靴専門店「ゴロー」の登山靴だ。

この店の登山靴へのこだわりを感じた場面があった。登山靴を購入して7年目、そろそろ新調しようと思い、わざわざ東京に向いて、オーナーに相談したところ、「うちの靴は7年ぐらいではダメにならん！」と返り討ちに遭った。それ以降、ソールを貼り替えながら長年愛用し続けていくうちに、自分の足に馴染み、いつしか体の一部となった感覚になるから不思議だ。

私が登山を始めた40年前に比べると、登山用品の性能も格段にレベルアップした。登山装備が充実していれば、山では安全・安心で快適に過ごすことができる。登山用品を購入するにあたり、私の場合「迷ったら高いほうを買え」をモットーにしている。どちらかというと買い物無精の私だが、いざ登山用品の購入となると金に糸目をつけず衝動買いが絶えない。それでも、登山を始めて40年、いまだに使用し続けている登山装備が一つある。ピッケルだ。ウッドシャフトピッケルの逸品「シャルレスーパーモンブラン」。積雪期の登山では、いまやメタルシャフトのピッケルが主流であり、ウッドシャフトピッケルはほとんどお目にかからない。私にとって、このピッケルは装備を超えたお守り的なアイテムとして愛用し続けている。



登山靴とピッケル（シャルレスーパーモンブラン）

4. 海拔0mから標高3,000mへ

今年、還暦を迎えた私にとって、やってみたい夢がある。日本海（海拔0m）から北アルプス主稜線を全山縦走し、その後、中央アルプス、南アルプスを全山縦走、最後に富士山を登頂して、太平洋を目指すといったグレートトラバース。65歳までには達成したい。

今年の夏、北アルプス主稜線全山縦走の機会をいただいた。日本海親不知（新潟県糸魚川市）をスタートし、白馬岳、鹿島槍ヶ岳、水晶岳、槍ヶ岳を經由し、西穂高岳を目指した。

北アルプスは、親不知から朝日岳まではアップダウンが連続する非常にタフなルート。朝日岳から白馬岳は、高山植物の宝庫で緑と残雪のコントラストが非常に美しい。白馬岳から鹿島槍ヶ岳までは後立山連峰と

呼ばれ、岩稜地帯で、不帰の剣やキレットなど難ルートが連続する。針の木岳から烏帽子岳は、アップダウンの連続で登山道も崩壊が進行している。北アルプスの中でも訪れる登山客が最も少ない。烏帽子岳から槍ヶ岳は、裏銀座と呼ばれ登山道は緩やかで危険な箇所もなく、奥黒部の景観を楽しみながら歩行できる快適なルートである。最後に、槍ヶ岳から西穂高岳は、槍穂高連峰と呼ばれ岩稜地帯の連続で、北アルプス縦走路の中でも屈指の難コースである。

今回、親不知から朝日岳までは、疲労と脱水症状で体調を壊したものの、その後は好天に恵まれ、体調も良好を維持することができ、順調に進むことができた。それでも槍ヶ岳に到着した時には、台風の影響で天候悪化が連続するということがあったので、穂高岳方面の縦走は断念し、槍沢を經由して上高地に下山した。

今回の山行で特に印象に残ったのは、奥黒部での素晴らしい景観に巡り合うことができたこと。過去、何度となく訪れたにもかかわらず、全て雨天とガスの影響で景色を楽しむことが一度もなかった。それが今回、雲一つない晴天に恵まれ、奥黒部を代表する水晶岳、鷲羽岳、黒部五郎岳からの展望は素晴らしいものがあった。そのため黒部五郎岳では、頂上に2時間もくつろいでしまった。

振り返ってみると、天気や体力低下を懸念したが、日々のトレーニングと連続した好天にも恵まれた結果、最後の穂高連峰までは到達できなかったものの、体力面での不安も払拭でき、次の計画に向けて自信を得たことで一定の成果はあったと思う。



北アルプス主線縦全山縦走計画図



水晶岳からの展望（バックは槍穂高連峰）

5. 登山の魅力って何？

近年、NHK「にっぽん百名山」や「日本百名山」と筆書き」などテレビなどを通じた山に関する豊富な情報や「山ガール」に象徴される登山人気により、登山人口は急増していると思う。さらに、韓国人を始めとした海外からの富士山やアルプス登山客も増加しているらしい。

登山形態も、従来からのザックを背負って歩行する形態に加えて、軽装で長時間走り抜けるトレイルランニングもあちこちで見かける。

そのため、登山の楽しみ方にしても頂上を目指すだけでなく、高山植物や動物を求めるなど自然を楽しんだり、写真や絵画など景色を楽しむなど多様化している。

私の場合、若いころは体力にものを言わせて、ただがむしゃらに頂上を目指したものだ。コースタイムの3分の2の時間で踏破することに妙なステータスを感じたものだ。

そのため、中年期になっても若いころの成功体験と現在の体力や健康とのギャップによって何度も泣かされる羽目になった。こんなことを繰り返していくうちに現在では、ようやく年齢相応の登山ができるようになった気がする。それと同時に、登山の価値観なるものが見えてきたような気がしている。最後になるが、本章のまとめとして私見であるが登山の魅力を列挙してみる。

○心身ともにリフレッシュできる場所

日常とかけ離れた大自然に身をおくことでリフレッシュできる。山に入った瞬間から、日常の営みはただ歩くだけ。しかし、街を歩くのと違って歩くことだけに集中できる。情報量の多さに加え人間関係の構築を気にしていかなければならない日常生活とは一線を画

すところだ。要は、山では余計なことを考える必要がない。それがリラックスできる要因と考えている。

○優雅で心豊かになれる場所

山では例えようのない景色に遭遇できる。例えば、冬の濃い青空と雪のコントラスト、モルゲンロート(山が朝焼けで真っ赤に染まる様子)や真っ赤に燃える夕日、そして満点の星空に出会った時の思わず身震いするような感動は登山者でないと味わえない。頭を空っぽにして、いつまでも見ていられる。

また、食事にしても贅沢する必要はない。日常生活では時間がないときに食べるカップ麺やおにぎりは、高級料理に勝るほどのごちそうに変身する。

○達成感を味わえる場所

登山は、安全第一ということは言うまでもない。しかし、私が登山計画を立てる場合、ちょっぴりハードルを上げて設定する。決して、無理とか無謀という意味ではない。例えば、同じ山を目指すとしても一般ルートからバリエーションルート(ザイルを必要とする岩稜登山)にしてみたり、無積雪登山から積雪登山にしてみたり。

そうすることで、心地よい緊張感を持って登山できること自体に喜びを感じられ、さらにこれを克服した暁には、満ち足りた気分を味わうことができる。

6. おわりに

「山を思えば人恋し、人を思えば山恋し」歌人で登山家の百瀬慎太郎の名句である。言い得て妙だ。

少なくとも私のこれまでの人生において、現実の社会生活と雲上での登山生活がうまくかみ合っただけのメリハリの利いた生活を送ってこられたことに満足している。

登山を始めて40年の節目で、今回の執筆を通じ登山生活を振り返る機会を頂いた開成工業(株)並びに(一社)日本建設機械施工協会に感謝を申し上げます。そして、思いの丈を書き綴った結果、既定文字数をはるかに超えた冗長な文章にもかかわらず、最後までご高覧いただき、ありがとうございました。

—やまべ よしのぶ 開成工業(株) 福岡営業所 技術部長—

